九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

認知症患者の歯科治療に関する対応法の検討

湯川, 綾美

https://hdl.handle.net/2324/4110467

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（臨床歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式３）

氏　　名　：湯川　綾美

論 文 名　：認知症患者の歯科治療に関する対応法の検討

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

超高齢社会を迎えた日本では認知症患者の増加に伴い、歯科医療やケアの実施が困難となる患者が増加している。歯科医療従事者は認知症患者を理解し、患者それぞれの状態に配慮した歯科治療、口腔衛生管理、口腔機能管理を継続的に認知症高齢者に提供することが重要であると考える。本研究では、急性期、維持期の病院に入院した多障害および多疾患を抱え、口腔機能が低下した認知症高齢者を対象として、歯科治療に必要な対応法について症例を通して検討した。

第１章：認知症を合併した舌癌の高齢患者に対し、術前より包括的ケア技法を取り入れた周術期口腔機能管理を通して経口摂取支援を行い、良好に経過した症例を経験したので報告する。患者は67歳男性、舌・口底癌（T4aN2M0）の診断の下、腫瘍切除術及び再建術が計画された。当院入院２年前に脳梗塞の既往があり、左上下肢の軽度麻痺及び認知機能低下が認められた。術前より周術期口腔機能管理を行った。術後は摂食嚥下機能が著しく低下し、リハビリテーション（以後リハ）が困難と予測されたが、咽頭機能が維持されたため経管栄養を併用した嚥下調整食の一部経口摂取をゴールとした摂食嚥下リハを行った。リハ中は認知症患者への包括的ケア技法を取り入れた。リハに対する理解力不足や意欲低下から負担が大きい接触嚥下リハ継続は困難と思われたが、退院時には設定したリハのゴールを達成し、回復期病院転院後も口腔機能リハを積極的に継続することができ、現在に至るまで約２年間機能維持ができている。口腔癌の手術後に口腔機能が低下した認知症患者においても急性期病院入院中から適切にリハを行い、患者個々の認知症症状に合わせた対応法を取り入れることにより、経口摂取の維持とリハの継続が可能であることが示唆された。

第２章：脊髄小脳変性症（SCD）は、歩行時のふらつき、手の震え、言語に影響する進行性神経疾患である。一般に、SCD患者は、集中的なリハを行っても、日常生活動作（ADL）の改善は限定的である。重度フレイルのSCD患者に対し、義歯調整後に多職種連携でのリハが効率よく奏功したことによりADLの顕著な改善がみられた症例を報告する。また、口腔内で義歯調整が困難である本症例に適用された義歯調整法についても説明する。患者は81歳男性、既往歴はSCD、アルツハイマー型認知症。維持期病院歯科初診時には寝たきり状態の重度フレイルであり、一部介助でペースト食を摂取していた。無歯顎だが義歯不適合のため義歯

は使用していなかった。そこで両側性平衡咬合を付与するリマウント調整法を用いて口腔外で義歯調整を行い、多職種連携でのリハを継続した。その結果、著明なADLの改善が認められ、3ヶ月で介助なしでの食事ができるまでになった。口腔機能障害の改善後に行われる適合の良い義歯を装着してのリハは、良好な結果を得られる可能性がある。本症例で行った両側性平衡咬合を付与するリマウント調整法は、口腔内での義歯調整が困難な高齢患者に効果的であることが示唆された。

今後、認知症患者の数は増加すると推計されているが、今回行った認知症患者に対する包括的ケア技法を用いた歯科的対応法と、口腔外での義歯調整法による口腔機能回復は、今後の歯科における認知症患者に対する対応法として有効であると示唆された。